

明清時代の俗曲を読む

－『霓裳統譜』における容姿に関する表現をめぐって

A Research on popular songs of Ming and Qing Dynasty

竹田 治美

Harumi TAKEDA

1. はじめに

清の乾隆六十年（1795）に版行された俗曲総集『霓裳統譜』八巻、622条の歌曲が輯録された。¹⁾『霓裳統譜』には山東・河北・天津一带を中心とする北方の俗曲が多く、明代と清代前半の北方地区の俗曲総集である。『霓裳統譜』所収された歌曲は、少しの社会的なテーマや歴史物語に関わるものもあるものの、殆どの数を占める歌曲は恋愛や情欲をテーマとする情歌であり、多くは別離・閨怨・思春・私通などである。情歌の作者は主に女性であると思われる。これらの歌曲は俗曲、時調、俚曲などと呼ばれ、明清時代に民間各地で流行した歌曲から発展し、その多くは歌童や妓女たちが歌い継ぎ、旅商人によりさらに広まっていったものである。

俗曲は平俗で記憶しやすく、歌いやすく、そして内容も面白いことが要件とされる。民間に流布した情歌は、軽薄短小かつ淫猥で広まりやすいものだが、意識的に蒐集しなければすぐに散逸してしまう。また、人の情欲に関わるものであり、そのうえ捜羅は容易ではなく、類似の選集はけっして多くない。

明清時代の俗曲についての研究は、20世紀初めにさかのぼることができる。俗曲は文学性や文学史、音楽史の視点から重視され、さらに社会学、民俗学、哲学の分野まで広がる。周作人、鄭振鐸、李家瑞、朱自清、趙景深をはじめとする先学の研究に導かれて、少しずつ発展してきた。本稿は、歌曲に用いられる多様な表現に焦点を当て、情歌において女性の「語り」の諸相へのアプローチを試みるものである。

優れた文学作品はその時代を表現している。人々が必要とする芸術には、必ずその中に人々が求めるメッセージが入っている。これらの作品は必ず歴史のかつ社会的な要素と客観性があり、そこにはその時代の普遍的な価値観がある。もちろん俗曲も例外ではない。俗曲は明清時代の特定の社会環境の中で、新しい形と意義が持たされ、他の時代の歌曲とは大きく異なり、文学形式としても、曲牌としてもその時代性の特徴がはっきりとみられる。「情詞兼麗（情感も歌詞も麗しい）」とされている『霓裳統譜』の価値はここにある。

俗曲が明清時代にひときわ異彩を放った要因として明代の末から清代の初頭において江南地域の各産業の生産力が大幅に発展したからである。商品経済の発展は、哲学思想、社会秩序、社会気風、庶民の日常生活など各方面に大きなインパクトを与えた。庶民から上層士大夫、農村から町、江南から華北に至るまで生活の豊かさによる変化が現れ、特に逸楽に大きな変化をもたらした。

また、庶民と商人の社会的地位の向上と政治の緩和による束縛が少なくなり、その結果、自由奔放な気風が満ち

¹⁾『霓裳統譜』乾隆六十年集賢堂初刻本 明清民歌時調叢書 中華書局1959年刊行

溢れ、人々は解放的な生活を求めようとした。既存の士大夫文化以外に、市井文化にもはっきりとした特徴が現れるようになった。この時代に、戯曲、小説などの通俗文芸も盛んに行われ、他の時代と異なる特徴が現れた。さらに印刷術の発達と出版業の盛行により、人々は簡単に大衆書物を手に入れることができるようになった。そこで、最も注目されるのが「三言二拍」のような通俗小説や『金瓶梅』を初めとする好色本である。「貴族士子皆好戯劇」の中でも異彩を放つ「エロチシズム」的な作品として『霓裳統譜』、『万花小曲』、『絃小曲』、『白雪遺音』、『綴白裘』が注目されている。

これらの歌曲には衣食住行、娯楽、祭事、欲望などの常生活にかかわるすべてが含まれる。特に情歌において女性の感情、情欲、性愛などの繊細に描かれている。多くの歌曲は新鮮で面白い。これらの歌に多様な視野をもたらすことができると言えよう。

2. 俗曲集と編者について

本稿は『霓裳統譜』乾隆六十年集賢堂初刻本を底本とし、内容確認の参照資料として同時代の俗曲集『白雪遺音』と戯曲集『綴白裘』²⁾を用いる。以下、これらの俗曲集と著者について紹介しておく。

『霓裳統譜』には河北一带を中心とする北方の俗曲が多く、明代と清代前半の北方地区の俗曲の総集であり、蒐集したのは民間楽師の顔自徳である。顔自徳についての記録は極めて少ない。顔自徳は天津の人で康熙から雍正年間に生まれ、幼年時代に音律を身につけ、博覧強記で有名な楽師である。若い時から長年乾隆年間の皇室祝典での音曲の上演に参与していた。顔自徳は晩年、記憶に基づき、かつて都の歌館や妓院で愛唱された歌謡や小歌を弟子らに記録させ、王廷紹に校閲を依頼した。乾隆六十年(1759)、王廷紹は彼が校閲して序を付けた『霓裳統譜』を上梓した。校閲した王廷紹は詩書に精通した朝廷の官吏である。

王廷紹(1763~1820)、字は善述、号は楷堂といい、清の大興の人である。乾隆五十七年(1792)の挙人に合格、嘉慶四年(1799)の進士に登第し、紀昀が彼の科挙合格時の主任試験官であったという。その後、庶常から刊部主事、刑部員外郎に封じられた。著作に『澹香齋詩草』がある。王廷紹の自伝の中で「馬骨峻嶒、吃豆吃麩兼吃草。車声歴碌、拉人拉馬不拉錢(馬の骨が山のようにかさばり、豆や麩と草も食べる。車の声が軋轆として聞こえるが、人を拉し、馬を拉し、錢を拉せず)」という対聯に、科挙試験に度々失敗し、家計が困窮して家は路地の厩と変わらないと自嘲の記録が残っている。鮑桂星(1764~1826)は自分の著書『覺生感旧詩鈔』に王廷紹を「貧窮だが気負わず、傲然と世を睨む」と讃える。³⁾

王廷紹のような士大夫の身分で情欲が溢れる俗曲集を校閲、刊行したことは、当然世間の注目を浴びた。王廷紹は『霓裳統譜』序文に「朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋。(朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず)」という古典を用いて、士大夫らが自分の殻に閉じこもりがちなのを諷諭した。さらに彼は、この選集の一部には「文才子の作もあり」、また一部には「村嫗蕩婦之談(村の婆さんや娼妓の歌謡)」もあると指摘した。さらに「情詞兼麗」の雅曲はもちろんのこと、同時に「捧腹噴飯之作(抱腹絶倒の作)」も楽しむことができるとした」と記している。

『白雪遺音』四巻、780条の歌曲が収集され、華広生による編輯されたものである。彼は郷里の山東歴城の俗曲を集め始めたのは嘉慶二、三年からで、その後、「各同人皆問新覓奇、筒封函遞(あちこちの同士がみな新しい曲や

²⁾ 『白雪遺音』道光八年玉慶堂刊刻 明清民歌時調叢書 中華書局1959年刊行

『白雪遺音』文芸書房 康德九年発行

『綴白裘』中華書局(清)錢德蒼編選 汪協如校点 2005年出版

³⁾ 鮑桂星の字は双五といい、一の字は覺生という。安徽歙縣の人で嘉慶年間の進士である。宣宗が即位の時、宮廷に召され、大典の編修に就き、詹事となる。著書に『進奉文鈔』、『覺生詩鈔』、『詠史懷人』などがあり、『唐詩品』八十五巻を編輯した。

珍しい曲を探して、書簡で送ってくれ」、各地から歌曲が集まった。嘉慶九年（1804）には、『白雪遺音』の収集作業は終わっていたようで、華広生はこれに自序を書いている。ただし道光八年（1828）になるまで、正式に上梓することはなかった。

『霓裳統譜』と異なり、『白雪遺音』の編者華広生は無名の人である。彼は字を春田といい、乾隆、嘉慶年間に山東歴城あたりに生まれ育ったこと以外、他の事跡は全くわからない。この書に序を寄せた人たちも同じく無名の人である。

『白雪遺音』の序文から編者たちの生涯がうかがえる。彼らは華広生と同様、ある程度の教育を受けたものの、科挙受験には至っていない。編集者らは、自分のことを「見識に欠け、何事も成しえず、異郷に身を寄せている。各地に寄食し、各地の山水に遊び、名勝旧跡を尋ねた。音楽や戯曲は、いつも私の気持ちを晴れ晴れとさせてくれた」という。

また、その他の者も、「若いときから卑しい身であり、魚釣りや鳥を射ったり、馬を駆ったりする以外、何の取柄もない。勉学のため家を離れてからは、専ら漫遊を楽しみ、奇山秀水と風流人物で、目睹していないものはない。特に文芸や音曲には大変心を奪われた」といっている。

そのため、彼らは科挙試験で志を得られなかったが、各地を放浪し、人情と世事についての豊かな体験を有した。また、都市の庶民社会や農村の民衆に接触する機会が多く、近い価値観を持っていたはずである。たとえ儒家の教育を受けたとしても、恐らく上層士大夫のような礼教による強い束縛がなく、民衆のストレートで奔放な感情表現に共鳴したことも理解できる。こうした下層の文人や一部の上層士大夫が、共に民間の情歌を楽しんでいたのだとすると、歌詞や曲の内容も一定の教養がみられ、精練された文筆も美しいため、さらに各層の人が参与していく。

『霓裳統譜』の蒐集者の顔自徳は河北天津の人であり、『白雪遺音』の華広生は山東歴城の人である。そのため、二つの選集が選んだ歌は、大半が北方で流行した俗曲である。これは歌曲の言葉づかいと文字の使い方からもわかる。しかし、多くの歌曲は広範囲に伝播していたため、厳密に地域を限定することは難しい。

これらの流行曲は、広い範囲で流行していたほか、多くの歌は数百年にわたって歌われた。『霓裳統譜』と『白雪遺音』は、編集刊行の時期が非常に近い。確かによく似た箇所がいくつかある。『霓裳統譜』には「寄生草」が主流であるのに対して、『白雪遺音』には「馬頭調」の歌が大量に見られる。むろん、編者華広生の好みあるいは収集の環境などによる可能性があるが、彼が意識的に庶民に近いものとして「馬頭調」を選んだ可能性もある。ただし趙景深は、『白雪遺音』の序も「『馬頭調』の曲調は『寄生草』の借用だ」と指摘する。⁴⁾

二つの選集を比べると、『霓裳統譜』の輯録は『白雪遺音』とは大きく異なる。『霓裳統譜』は曲師が長年の演奏経験により、晩年、都の芸人たちの曲目を思い出して記録したものである。後者は華広生と友人らが四方を搜羅し、郵便通送によって集めたものである。

しかし、いずれにしても、歌曲の多くは歌手や妓女たちが歌い継いだものであり、各地から来た旅商人に伝わっていく。さらに各地から流れ込んできた歌曲を絡めとり、融合された。そのため、各地で歌い継がれた率直で豊かな情歌は、多様な情報が潜んでいることがわかる。

さて、もう一つ明清時代に流行した戯曲集は『綴白裘』である。『綴白裘』の編者らの生涯については、何の記録もない。この選集に収録された曲は当時各地で流行していた演目であり、そして乾隆本『綴白裘』以前のものであるということである。

⁴⁾ 『白雪遺音』「序」 p.6

戯曲の収集は情歌と通ずるところもあれば、大きく異なるところもある。民間で演じられた草芝居も情歌と同様に卑俗で淫猥だということから、文学に通暁する人たちがそれを輯録することを躊躇することが多い。一方、戯曲の創作と上演は士大夫の生活の重要な一部にもなっていたため、文人や士大夫は戯曲の選集に従事しつづけていた。『綴白裘』はその一例である。

この撰集は錢思沛（徳蒼）が、玩花主人の編んだ『綴白裘』を底本とし、当時舞台で流行していた崑曲と花部を添削して成ったものである。乾隆二十八年から三十九年（1763-1774）の間に、全部で十二編四十八集まで増刊され、錢思沛は彼自身が蘇州で開設した宝仁堂で刊行した。この選集は何度も『綴白裘』の名で増刊されつづけており、編者はおそらく一人ではない。出版後、一気に人気が出て、絶えずに各地の書坊で複製された。

康熙及び雍正年間の他の版本もあり、それは日本にも伝えられた。幾度となく増削・刊行されていることから、この書の当時における人気のほどがうかがえる。その一部は『霓裳統譜』や『白雪遺音』にも収録されており、この二冊の情歌選中の歌と同じ曲牌であり、内容も大同小異である。多くの歌本の印刷の品質が非常に悪くて値段も低廉であったため、おそらく都市の一般庶民を対象としたものであろう。

俗曲集の歌曲の多くは情歌であり、女性の喜怒哀楽の情緒が現れており、情欲の多様な様相がみられる。歌詞にしても素朴で女性の奔放な感情がストレートに表現されている。また、明清時代の通俗文化、民俗文芸の第一次資料としての価値もあり、さらに大量の口語と俗語が残されており、特に北方の方言と口語研究の貴重な資料である。

3. 情歌における容姿についての表現

俗曲の生まれてと発展は、都市の伎楽の流行、隆盛と密接にかかわる。俗曲集の歌曲の最大の特徴として、表現の豊かさである。方言や口語、俗語、擬態語、擬声語、疊語が多く用いられている。さらに表情、容姿、服装はむろんのこと、周囲の人物、動物、花鳥、風景、環境、背景の描写まで生き生きとした筆致が工夫されているようにみえる。歌い手は妓女などが多いため、軽妙された言葉の風格も恣意、放縦かつ艶俗で率直であり、随意性も強い。ここの名もなき女性の恋、性、生と死に関する描写は、その時代の普遍的なものではないかと言えよう。

さて、古今の歌曲の中に周囲の景色や女性の容姿を吟詠するのが定番であるといってもよい。『敦煌曲子詞集』にも多くある。例えば「内家嬌」が代表的な歌である。

絲碧羅冠，搔頭墜髻鬢，寶裝玉鳳金蟬。輕輕傅粉，深深長畫眉，雪散胸前。嫩臉紅唇，眼如刀割，口似朱丹。
渾身掛異種羅裳，更薰龍腦香煙。

ここには上層社会の令嬢と違った美的感覚を持つ庶民社会の女性像を描かれている。鮮やかな衣装、厚化粧などは典型的な庶民の視点からのセンスであり、このような描写表現は当時の歌曲、戯劇、小説にもしばしばみられ、人々が求めている情趣であろう。

『霓裳統譜』においても景色描写と女性の容姿・服装、化粧に関する表現が特に多くみられる。もちろん、雰囲気くまどるためであり、聴衆と共感するためでもある。これらの叙述から登場人物の年齢、性格、身分、生活、喜怒哀楽の情緒、さらに人間関係などがわかる。含蓄的あるいは露骨的に女性の容姿などを用いるのは、その人の個性、「情」あるいは「性」を表すためである。ここからさらに当時の美的感覚もうかがえる。

現代の我々がメロディーや律調がない環境の中でも情歌の詞章をじっくり読むことで、当時の人々の生き生きとした感情や、日常生活のあり方を掬い上げることができる。礼教社会を中心としてははぐくまれてきた正統文学作

品には収まらない、多様な発想と表現に出会う貴重なことであり、これらの情歌の世界を五感で味わえることができる。

歌曲に身体の描写表現について、特徴的な用い方に工夫があり、ストーリーの展開とともに豊かな情緒が描き出されている。今回は容姿についての記述に着目し、分析を試みる。

・眉毛についての表現

・ 雅粧翠黛，眉尖上幽恨 嚮誰傳，卻教我一縷柔腸，系不住薄幸人 留戀在天涯。

—【春風起吹透香閣】 卷1

その他、「愁壓眉叢，蹙損仙眉」、「零落芙蓉，畫眉人去」、「顰一寸眉尖，蹙一寸眉尖，惜春去」、「一個個眼角眉稍將人戲」、「蛾眉懶去畫，風來時柳皺眉」、「夜迢迢淚愁眉」、「春恨鎖眉尖，針線無心不待拈」、「愁眉淚眼，獨自個傷慘」、「眉橫翠，遠春山」、「愁眉不展，不展愁眉」、「神思倦倦體瘦眉低」、「春歸兩淚連，恨鎖兩眉尖」、「清晨起少個畫眉郎，思思想想難成寐」、「愛隻愛的眉黛雲翹」、「零落芙蓉，画眉人去」、「顰一寸眉尖，蹙一寸眉尖，惜春去」、「一個個眼角眉稍將人戲，蛾眉懶去画，風來時柳皺眉」、「夜迢迢泪愁眉，春恨鎖眉尖」、「針線無心不待拈，愁眉淚眼」、「自個傷慘 眉橫翠」、「遠春山，愁眉不展，不展愁眉」、「神思倦倦體瘦眉低」、「春歸兩淚連，恨鎖兩眉尖」、「清晨起少個畫眉郎」、「思思想想難成寐，愛隻愛的眉黛雲翹」、「喜上眉稍，情人你來了」、「柳眉一挑，雲鬢堆鴉，喜孜孜半真」、「眼似秋水眉似月」など多くある。

『霓裳統譜』と『白雪遺音』の違いをこれらの描写表現でみられる。『霓裳統譜』は、繊麗かつ楚々たる、歌の背景と登場人物の情趣を描き出すことによって、聴衆の共感をえる。しかし、『白雪遺音』は飾らなく素朴に「双眉」、「眉尖」、「眉間」、「蛾眉」のような簡単な言葉を用いてストレートにストーリーに入るものが多い。

眉毛についての描出は、『霓裳統譜』と『白雪遺音』に約200個がある。ほとんど離別、失恋、思念、不幸、片思いなど哀婉、憂い気持ちに用いる。実際、嬉しい気持ちと気分が浮き立っているに使われている表現は「喜上眉稍，情人你來了」、「柳眉一挑，雲鬢堆鴉，喜孜孜半真」があるものの、多くはない。また「眼似秋水眉似月」は「顔がきれい」という容姿を形容する平叙表現である。美しい容姿であることを特別に多くのことばを使わず、精練された表現が多い。これも情歌における一つの特徴である。

・ 風流俊俏，難畫難描，桃腮粉面，相襯著柳眉稍，杏子眼一顰，就起光毫，鶯聲燕語，揪人的膽，珠圍翠繞，恰更似勾魂的票，金蓮一舉尖又瘦，嬌滴滴柳腰兒一扭，我就魂魄兒飄搖。

—【風流俊俏】 卷6

たとえ一つの眉からでも多くの情報が現れている。主役は若い女性それに妓女が多い。彼女らは情熱、強直、率直あるいは柔弱な人であることをうかがえる。また、表情で故事の背景を示し、主役の女性の身分と性的な魅力を暗示する。これによって聴衆が歌いかける相手を想定でき、より生き生きとした主役の様子が浮かび上がってきて、さらに劇的な効果を感じられる。

・目についての表現

・ 春色兒嬌，蝴蝶飄搖，他在那百花叢裏鬧吵吵，有個大膽的狸貓他，偷著眼瞧，蝴蝶顛翻，任著意飛，貓的眼睛珠

兒不住的上上下下繞，他可滿心裏要撲，撲也是撲不著。

—【春色兒嬌蝴蝶飄搖】卷7

この一首は、猫の目を借用して、猫が蝶々を追う目線で色男を軽妙に描き出している。この歌は色男の色欲の心を絶妙に描出していることを通して、その背景に登場していないお茶目な少女の姿と動きが鮮明に描かれさた。また、男性に戯れ、浮き浮きとした気持ちも一目瞭然に現れている。この完成度の高い情歌は、言葉遣いに新鮮な息吹が感じられる。

少女ら常に蠅や蝶々、山猫、犬、鳥などの日常生活の光景や事物、身近にあるものを用いて譬えとし、時にはそれに媒体の役割を演じさせる。

風流俊俏，難畫難描，桃腮粉面，相襯著柳眉稍，杏子眼一瞟，就起光毫，鶯聲燕語，揪人的膽，珠圍翠繞，恰更似勾魂的票，金蓮一舉尖又瘦，嬌滴滴柳腰兒一扭，我就魂魄兒飄搖。

—【風流俊俏】卷6

「杏眼」はかつて中国人の伝統的な美人の目である。この歌には、妙齡の女性の容姿が細やかに描かれ、艶俗で軽薄な娘のイメージがうかがえ、色目で男性を誘惑する情景も捉えられる。

また、目について次のような描写表現がある。

「眼似秋水眉似月」、「兩眼一迷縫」、「兩眼直瞪瞪」、「盼你盼的眼兒穿」、「眼睜睜離別」、「眉來眼去將奴戲，兩眼兒淚汪汪」、「眼角傳情真有」、「醉眼朦朧」、「兩眼淚如麻」、「兩眼發烏」、「奴家懶待把眼睜」、「眼含痛淚蛾眉縐」、「盼到天明了，相思害的兩眼黑」、「勞乏佳人眼皮兒垂」、「時常惹你的冷眼看」、「兩眼一密縫，眼望賓鴻罷喲」、「眼中血，淚如灰」、「哭壞秋波眼，拭破芙蓉腮」がある。

これらのものは、目や目の動きなどによって離れたくないまたは待っているという哀願を婉曲的に訴える。

俗曲集の中に、情歌の以外、諧謔的な歌曲も多くある。「婆媳頂嘴」はその代表的なものである。

・(前略)【老】我那孩子，一都的人才，就是你好，提留著兩個母豬眼，一腦袋黃頭髮，一雙奸臣腳，走道兒，好像鴨子是的，摔拉摔拉的。(後略)

—【婆媳頂嘴】『白雪遺音』・卷2

これは、姑と嫁の言いあいという物語で、姑は嫁を罵り、「おすの嫁よ、お前は豚の目、バサバサの髪、奸臣の足、歩きはまるでアヒルのようだ」など、娯楽性の高い庶民の人間喜劇で女性のリアルな生活を表現している。

・肌についての表現

因他消瘦，征鴻幾度書未修，離愁，相思病怕黃昏後，春山翠黛鎖，秋波淚暗流，思憂，重門扣，夜雨收，冰肌損，不耐秋，一陣陣西風吹來，暗數更籌，巫山夢裏求，隻落得鴛鴦錦帳冷，芙蓉繡枕幽，盼一紙書回平安字，望斷雙眸，懶上妝樓，淚珠滴透衣衫袖。

—【因他消瘦】卷3

その他、「薰不暖舊紅衫袖，冷透冰肌」、「怎奈他香肌玉骨，久作了月影花陰」、「孤影兒伴身搖，瘦香肌」、「衣脫水肌瘦」、「遙望見十裏長亭，減了玉肌」、「原何麵黃肌瘦減形容」などがある。「肌」を形容する表現は「冰肌」、「香

肌]、「玉肌」三種類のみがある。白くて透き通った美しい肌、真冬の溪流のような冷たく輝いている女性の肌を通して哀愁を語る。また、病的で柔弱な女人が透き通った白い肌を視覚的に描出することが、当時の審美感覚であり、多くの作品からみられる。「肌」は性愛を暗示する役割でもある。

・足の表現について

人在深深院，樓閣高半天，響雲環佩聲，驚起穿簾燕，紅粉青銅鏡，紫竹白玉闌，嬋娟迎風立，柳腰彎，櫻桃口，小金蓮，一陣陣的香風，露滴牡丹，溫柔襯花間，眉橫翠，遠春山，眼底下千百種的風流，斜插著一根玉簪，雲碧窗，分明照見梨花麵。

—【人在深深院】卷3

嬌滴滴形容可愛，弱蓮花藕半開，似這等芙蓉未足嬌嬌態，烏雲散亂，鳳髻微歪，乜斜著倦眼，折整繡鞋，闌幹外花正開，輕移蓮步，花下徘徊，按金釵，探身招朶花兒戴。

—【嬌滴滴形容可愛】卷3

足には「足」、「脚」と「蓮（金蓮）」三種類の表現がある。俗曲集に「足」の用例は少なく、「脚」は足の大きさを示す平叙句が多い。これは口語が大量に使用されたからであると指摘できる。

・情人愛我腳兒瘦，等他來時賣些風流，大紅鞋上面就拿金絲扣，穿起來故意又把鞋尖露，淡勻粉臉，梳上油頭，等他來站在跟前教他看一個殼，今夜晚上和他必成就。

—【情人愛我腳兒瘦】卷4

我今宿了羅家店，店裏頭有個俊俏的女孩，那個女孩哪，臉蛋好似桃花瓣，不擦粉好似那個飛羅麵，羅裙下露出了小金蓮，那個金蓮不大不小隻有二寸半，怎能殼趕上前去攔一攔。

—【我今宿了羅家店】卷4

情歌の中に女性の足についての描写は、他の身体部分より極端に多くみる。当然、男を誘う策略である三寸金蓮を、女性の性的な魅力として誇示できる。女性の自慢の武器として足を大胆に歌い、そこからさまざまな情報が見えてくる。足は男女ともにとって特別なものであった。視覚と触感が両方満たされるものとして、足を愛撫し、夢中になり、性の悦楽を謳歌するシーンが多々ある。これは纏足の流行と金蓮への崇拜といった明清の習俗と、官能性を重視する明清の俗曲の性格を端的に表している。

一方、金蓮と大きく違い、みじめな不細工で不器用、「大足」の悪口三昧な歌もある。「足」に関する美醜感覚は、はっきりとわかる。例えば「揚州歌」の「丈夫嫌我的腳兒大（夫は私の大足を嫌っている）」がその典型的なものである。

丈夫嫌我的腳兒大，我也不怨我的媽媽，從小兒未曾裏腳我就先害怕，到如今一雙到比兩隻大，去年一尺，今年兩紮，遭瘟的丈夫的鞋兒，我也穿不下，臊死人，丈夫鞋兒穿不下。

—【丈夫嫌我的腳兒大】卷8

「私の足の大きさは、去年が一尺、今年は二咫」という誇張とした口調で纏足をしていない大脚を笑いのネタにすることによって、主人公である妻のみじめさと悔しさを淋漓たる達意できていた。

その他、黒々とした髪、玉のような手、赤い唇、ほっそりした腰についての描写も多い。「玉美人」がその代表的な歌である。「玉美人兒生的俏、(唇似櫻桃)。十指尖尖、巫賽過銀條、(楊柳細腰)。小金蓮、咯登咯登咯登登的把樓梯超(步步登高)」。

歌詞の構成はいかにも工夫され、恋愛と情欲を正面から描く以外に周囲の要素から描くことによって、情趣が精彩を放つ。

4. おわりに

ここまで『霓裳統譜』を中心に明清時代の情歌における容姿を描く用例を起点に女性の「語り」についての描写表現を分析してきた。容姿の描写表現は作中主体の心のありさまを映し出すものであったはずである。情歌に豊かな情緒が溢れ、身体、衣装、しぐさは花鳥風月と同じように詠物の一素材であり、そこから女性の欲情の様相に関する繊細で奥深い描写がみられる。

容姿を用いて暗喩あるいは明喩に情熱的なまたは哀婉な恋愛感情を反映し、情愛を漂わせている。情愛が深まれば、周囲の景物もいっそう情趣を増すものになる。女性たちは多種多様な事物に相思の情を託し、愛情を伝達する形式として情歌によく見られる手法である。限られた紙幅と空間の中で、小さなドラマを描き出し、洗練された言葉でその魅力を十分に発揮しようとする。容姿に色彩や特徴と性質をもたらし、なるべく多くの情報を聴衆に与え、想像させるためであろう。

『霓裳統譜』の情歌は日常的な流行歌謡であるが、豊かな表現から女性自身が自由解放への渴望感、現状への不満と反抗の気持ち、婚姻、恋愛、情欲への憧れがうかがえる。また、当時の人々の思考法・価値観などの一端を映し出すものでもある。俗曲集は明清時代の女性研究の宝倉庫であり、ここからさまざまな視点に読み換えられているのである。

参考文献：

- 1) 張繼光『霓裳統譜研究』(台湾)文津出版社 2016年
- 2) 劉復・李家瑞編『中国俗曲総目稿』上・下
中央研究院歴史語言研究所発行 1932年
- 3) 李孝悌著・野村鮎子監訳『恋恋紅塵—中国の都市、欲望と生活』
台湾学術文化研究叢書 東方書店 2018年
- 4) 李孝悌(2008)『昨日到城市—近世中国的逸樂与宗教』台北聊経書房
- 5) 楊蔭瀏『中国古代音楽史稿』台湾・丹青図書公司 1986年
- 6) 鄭振鐸『中国俗文学史』人民文学出版社 1959年
- 7) 趙景深 中国文学小史 上海大光書局 1936年